

## 謡曲《蘆刈》小考

——季節の転換を中心に——

家原 彰 子

はじめに

謡曲《蘆刈》は四番組物、男物狂能とされ、『五音』及び『申楽談義』により、既存の曲が、世阿弥によって改作されたもので、古くは《難波》と呼ばれていた<sup>①</sup>。以下に梗概を記す。

摂津国に住む日下左衛門は、貧困のために妻と離別した。その後、女は京都のある貴人の乳母となり、相当の暮らしができるようになった。そこで女は従者を伴い、日下の里を訪ねた。ところが左衛門はすっかり零落しており、その居場所も分からない。難波の浦で折しも来合わせた蘆売る男から蘆を買おうとしたところ、女はその男がかつての夫であることを知る。男女は共に再会を喜び、連れ立って都へと帰る。

《蘆刈》は蘆刈説話に主な典拠をもちながら、その結末を大きく

変更していることが指摘されている。本稿では、謡曲における結末と季節の関わりについて考察し、謡曲《蘆刈》の特質を論じたい。

### 一 研究史と問題点の整理

謡曲《蘆刈》は既に多くの指摘があるように、『大和物語』一四八段をはじめとする蘆刈説話を典拠としている<sup>②</sup>。先行研究を踏まえた上で、蘆刈説話のうち謡曲《蘆刈》が主に依拠したと考えられている『大和物語』と《蘆刈》とを比較すると、夫婦の境遇や物語の結末において大きな違いがみられる。

まず夫婦の身分とその後の境遇について、『大和物語』では女は離別後、貴人の後妻となるのに対し、『蘆刈』では乳母となっており、離別しても夫婦関係がはっきりとは解消されていない。蘆刈人となった男は『大和物語』では「蘆になひたる男のかたひのやうな

る姿」<sup>③</sup>と醜さを匂わす程度に描かれるだけであるのに対し、『蘆刈』では卑しさや辛さが男自身によって語られ、より一層強調されている。ただし、その蘆を刈り運ぶ姿に風雅な心が感じられ、落ちぶれてもお都人としての心を残しているように描写されることにも注目しておきたい。

つぎに物語の結末については、『大和物語』では男の和歌「君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞすみ憂き」が詠まれた時点で一応の区切りがついている。男が一方的に侘びしさを述べた後、女はなす術がなかったのか、返歌さえもはっきりしないのである。再会はそのものの曖昧な結末で、復縁とは程遠いものとなっている。しかし『蘆刈』では、再会の後、女は男に正装をさせ、共に都に帰るといふ幸福な結末を明示している。

このように、女が新たな結婚をせず男を捜しに来たこと、蘆刈男を風雅な心を持つ人として描いていること、結末が幸福な再縁となっていることなどが、謡曲『蘆刈』において特徴的である。

佐成謙太郎氏は謡曲の思想の一つに「恋愛否定」<sup>④</sup>を掲げており、『蘆刈』の結末について、次のように述べている。

常に男女の恋愛を否定排斥してゐる謡曲作者が、本曲に夫婦再会の喜びを描いたのは、まことに珍しいことであつて、殊にこの出典である大和物語などでは、女は既に他に富貴の夫を得て、

再会の喜びはほんの一次的なものに過ぎない（中略）に対して、この曲の、相携へて京に帰ることとしてゐるのは、特に注意すべき点であらう。<sup>⑤</sup>

佐成氏は『蘆刈』に「夫婦再会の喜び」が描かれ、結末が「相携へて京に帰る」と大きく変更されている点に注目するものの、その理由について詳しくは言及していない。

また、『蘆刈』における季節については鳥居明雄氏が論じており、曲末の詞章を掲げた後、次のように述べている。

梅満開の春霞の水辺地で一對の男女の和合が語られ、しかもその男女が上京するというのであるのだから、その予祝性はきわめて調子の高いものだと言わなければならないだろう。ことに、冬から春への推移という、いわば年の更新の接点に男女の再会譚を投入した配慮は、説話享受の位相として、まず予祝性こそ基本として動かさないという明確な態度決定を表明したものと解してよい。<sup>⑥</sup>

鳥居氏は『蘆刈』における季節の推移に触れ、男女の再会を年の更新に当てはめたことに、強い予祝性があるとする。ただし、鳥居氏の解釈は難波における蘆よりも梅花を重視したもので、これには『蘆刈』の詞章にある「難波津の春は夢なれや／名に負ふ梅の花笠」や「難波津に咲くやこの花冬籠り今は春べと咲くやこの花」が色濃

く反映されている。したがって、梅に焦点を当てたところから引き出される「予祝性」は《蘆刈》の一面に留まるように思われるのである。

謡曲《蘆刈》の結末が他の蘆刈説話と異なり幸福な夫婦再縁となっており、曲中で季節が冬から春へと推移していることは明らかである。とすると、《蘆刈》の結末が夫婦再縁に変えられたことと、《蘆刈》の季節が春とされたことには関係があるのではないだろうか。また両者に関係があるとすれば、それは曲中にもどるように表れているのだろうか。以上の疑問点について、蘆に光を当てながら謡曲《蘆刈》における季節の転換を中心として考察していく。

## 一一 蘆に表れる季節と男の境遇

謡曲《蘆刈》の曲中では、冬から春という季節の転換がなされる。それは典拠とされる蘆刈説話からの大きく飛躍した点でもある。

蘆刈説話の持つ季節感を考えるにあたり、蘆刈説話の中でも謡曲《蘆刈》が主に依拠したと考えられている『大和物語』一四八段を取り上げる。この物語において季節の描写がなされるのは、京へ上った女が別れた男を思つて和歌を詠む場面のみである。

女は京に來にけり。さしはへいづこともなくて來たれば、このつきて來し人のもとにゐて、いとあはれ、と思ひやりけり。前

に获すすき、いとおほかる所になむありける。風など吹けるに、かの津の国を思ひやりて、「いかであらむ」など、悲しくてよみける。

ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の获ぞ答ふる

となむひとりごちける。

ここには「获すすき」という秋の植物が描かれ、悲しむ女の物寂しさを演出している。しかし、後に男を尋ねて難波を訪れる際には具体的な季節の描写はなされない。また『古今和歌六帖』第三、『拾遺和歌集』巻第九、『今昔物語集』巻第三十、『宝物集』第七、『源平盛衰記』巻第三十六、『神道集』第四十三などに含まれる蘆刈説話と関わるものは、いずれも季節を記さない。ここで考えておかなければならないのは、蘆刈という行為が行われる季節である。蘆刈とは本来、燃料にしたり簾として加工するために枯れた蘆を刈るので、晩秋や冬を表すものである。冬の蘆を描く例として「かものゐる入江のあしは霜がれてをのれのみこそあを葉成けれ」<sup>⑤</sup>（『千載和歌集』巻第六、冬歌、四三五、道因法師）などが挙げられる。特に季節の言葉を持たない蘆刈説話においても、この蘆刈という厳しい生業には、冬という季節感が含み込まれていると考えられる。

しかし謡曲《蘆刈》では、そうした冬のイメージを持つ「蘆刈」

を曲名に掲げるものの、曲中では春という季節が随所に表れているのである。例えば、女が共を連れて日下の里を訪ねる道行場面に「山本霞む水無瀬川」という詞章があるが、これは春景の美を述べた和歌、

見たせば山もとかすむ水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけん<sup>⑨</sup>

（『新古今和歌集』巻第一、春歌上、三三六、後鳥羽院）  
を踏まえた表現で、春という季節を匂わせている。

また、蘆刈男が女の一行の前で遊狂を見せる前の場面に、

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを<sup>⑩</sup>

（『後拾遺和歌集』巻第一、春上、四三、能因法師）  
という、難波の新春の美景を称えた歌がある。ここでは直前に引かれた古歌「大宮の内まで聞こゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び声」<sup>⑪</sup>（『万葉集』巻第三、雑歌、二三八、長忌守奥麻呂）で詠まれた網引きの風景を目の前に表すために用いられていると考えられる。

この時点で《蘆刈》の舞台が春に設定されていることが明示される。

しかしながら、謡曲《蘆刈》は単純に春という季節一色に塗り込められているわけではない。この一曲の中には、蘆刈男の苦しんできた冬の要素が多く織り込まれているのである。

ここで《蘆刈》の蘆刈男の境遇を考えるために蘆という語に着目する。本曲において蘆の描かれ方は大きく三つに分類できる。第一

は《男の身辺に関わるものとしての蘆》である。これには「蘆刈人」のような男の生業を直接示すもの、「枯蘆」といった落ちぢぶれた身を例えるもの、「蘆火焚く屋」といった現在の男の住まいの酷さや生活の辛さを表すものが含まれる。第二は《異名を持つものとしての蘆》である。蘆という植物は「よし」と「あし」という異なる名を持つことから、「難波の浦のよしあしも」というように、蘆とその善悪の意を言い掛けて用いられ、蘆と悪しとの掛詞は「あしかりけり」「あしからじ」といった男女の和歌においても効果的に用いられている。また「ワキさては物の名も所によりて変るよなう／シテナかなかの事この蘆を。伊勢人は浜萩といひ／ワキ難波人は／シテ蘆といふ」と土地によって呼び名が異なる蘆について語られる。第三は《難波の景物としての蘆》である。蘆は難波の情景を描く上で不可欠なものだとされておられ、「雨の蘆辺」のように雨の脚との掛詞から引き出された蘆や、「蘆の枯葉」という冬の蘆、「蘆の若葉」という春の蘆といった様々な姿が描かれている。

《蘆刈》においては、難波の蘆を刈り売るという過酷な仕事に、零落した男の苦しさが表されており、男は自身を「枯蘆」とまで例えている。つまり《蘆刈》における蘆は男自身と重ねて読むことができるのである。男の生業とする「蘆（あし）」には「よし」という異名があり、また難波では蘆と呼ばれるが伊勢では浜萩と呼ばれ

るなど、同じものであるが異なつた呼び名がある。そこには、周りの環境によつてその呼び名が変わつても、蘆は本来一つの植物であるように、たとえ男が零落し蘆刈という卑しい姿になつたとしても本来は同じ人間であるということが表れていると考えられる。物語の結末に向かい、蘆は枯葉から若葉へと変わり、植物としての蘆の再生が描かれているが、これも男の人生の再出発と重ねて解釈することができのではないだろうか。

さらに、ここで蘆と関わる「簾」と男女の再会について触れておきたい。《蘆刈》において、男女がお互いをかつての相手であること知る直前、蘆刈男が女の一行の前で遊狂の芸を披露する場面に、次のような詞章がある。

難波女の。難波女の。かづく袖笠肘笠の。雨の蘆辺も。乱るるかたを波あなたへざらりこなたへざらり。ざらりざらりざらりざららざと。風の上げたる。古簾。つれづれもなき心おもしろやこの「ざらり」「ざらざら」は、雨に乱れる蘆、その蘆のもとへ打ち寄せる波、また風の吹き上げる古簾の音を写し取つた言葉だと考えられる。ここでの蘆は難波の景物の一つとして描かれ、波は「難波津」や「難波の浦」のように海と深く関わる難波を代表するものである。このような、難波に縁の深い蘆や波がこの詞章に登場するのは、当然予想されることであるが、それでは簾はどうである

うか。簾は蘆を加工したものであるため、その連想から導き出されたものだとも考えられるが、この簾は単なる蘆からの連想というだけでなく、何かそれ以上のものを表しているとは考えられないだろうか。

ここでの簾は、難波を訪ねてきた女が乗る牛車の簾と考えるのが妥当であろう。蘆刈説話に登場する簾は、夫婦の再会、特に男が妻に気づく場面において重要な意味を持っている。『大和物語』では、女が男をかつての夫であると気づき、蘆の対価に物を渡そうとする場面で、

いかで物をとらせむと思ふあひだに、下簾のはさまのあきたるより、この男まもれば、わが妻ににたり

と、男は車の簾の内側にかかる絹布である「下簾」の間に妻の顔を見とめる。

また「神道集」「摂津葦菰明神事」では

夫不思議思乍喜、振々立寄、取ナカラミスノ内見入ケレハ、我本女房也

と夫は「ミス（御簾）」の内にいる女房を見る。

また蘆刈説話と関わりが深いとされる『神道集』『釜神事』にも

箕貫給、云庭中立、女房御簾ノ自内見出御覽、本夫也、（略）  
酒飯共被送、夜入人々閑後、佐有此有様吉々見ハヤト思、此

女房編垂ヲシテ少引開見給ハハ、男盃乍取振返見程ニ、日々急度見合ケリとあり、まず女房が「御簾」の内から夫に気づき、後に施しをした夫の様子を見るために「編垂」を開けて見ていたところ、夫と目を見合わせている。

このように蘆刈説話においては、妻が一方的に夫に気づくのではなく、男の方も妻を認識して初めて本当の再会となる。つまり、再会を真に決定付ける際の重要な小道具として簾（下簾・御簾・編垂）が用いられていると考えられるのである。以上のことを踏まえると、謡曲《蘆刈》の「古簾」には、昔馴染みの人であるかつての妻が掛け垂らす簾という意味が含み込まれ、それが風によって大きく吹き上げられるという情景を「心おもしろや」とすることで、既にそこに夫婦の再会を予感させているのではないだろうか。またその「古簾」は、謡曲《蘆刈》では消滅してしまった、蘆刈説話における簾を介して互いを知るといふ再会の名残とも言えるだろう。<sup>14)</sup>

謡曲《蘆刈》における蘆は冬の枯葉から春の若葉へと大きく転換し、それは男自身の境遇を表すものでもあった。さらに蘆の加工品である簾は、夫婦の再会を導く重要な語だと考えられるのである。

### 三 《蘆刈》における季節の転換と和歌の役割

謡曲《蘆刈》の中には、蘆が枯葉から若葉へと転換することに関

わる和歌が二首ある。これらはともに難波の土地を舞台とし、冬と春とが一つの歌の中に同時に詠み込まれている。ひとつは、男女が再会を果たし、和歌が夫婦の媒となったことが述べられた後の、難波津に咲くやこの花冬籠り／今は春べと咲くやこの花<sup>15)</sup>

（『古今和歌集』序）

である。これは仁徳天皇にことよせた歌であり、難波の梅の花が長い冬籠りを経て、今は春だと咲き誇る様子を詠んだものである。この和歌を踏まえて《蘆刈》は次のように結ばれている。

浮寝忘るる難波江の。浮寝忘るる難波江の。蘆の若葉を越ゆる  
白波。花も盛りに津の国の。こやの住居の冬ごもり。今は春べ  
と都の空に。伴ひ行くや。大伴の。御津の浦わの見つつを契り  
に。帰る事こそ。嬉しけれ。

ここでは、男にとつて今までの難波における蘆刈人としての辛い生活が冬籠りであり、妻と再会し共に都に帰ることができる現在の喜びを春であるとして、生活と季節が効果的に重ねられている。先に挙げた鳥居明雄氏の論で述べられているように、「梅満開の春霞の水辺地で一对の男女の和合が語られ」ており、《蘆刈》にこの和歌が用いられたのは、難波における梅を強調するというよりも、「冬ごもり」から「春べ」へという季節の移り変わりを導き出すことを主眼としていふと考えられる。

もうひとつの歌は

津の国の難波の春は夢なれや蘆のかれ葉に風わたる也

（『新古今和歌集』巻第六、冬歌、六二五、西行法師）  
 である。金春禪竹の『歌舞髓脳記』（康正二年・二四五六）の雑体の項に、

芦刈 浅文風 有心体

津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり

とあって、当該歌が引かれている。蘆刈説話には、ほとんどすべてに男女の間で詠み交わされる二首の和歌

君なくてあしかりけりと思ふにぞいとど難波の浦は住み憂き  
 悪しからじ善からんとてぞ別れしに何か難波の浦は住み憂き

が含まれ、これは謡曲《蘆刈》に引き継がれている。曲中でも男女の媒としての和歌が持つ効能を述べており、『蘆刈』においてこれら二首は重要度の高い和歌であると考えられる。しかし禪竹は、蘆刈説話に引かれている二首の和歌よりも当該歌に注目しているのである。禪竹によるこれ以上の説明は見られないが、<sup>15)</sup> 禪竹が当該歌に注目したのは、謡曲《蘆刈》における季節の転換がこの一首に凝縮されていると考えたからではないだろうか。

当該歌は、第二節に挙げた『後拾遺和歌集』「心あらむ」の歌を踏まえている。その表現については、かつて見た美しい春の風景と、

いま目の前に広がる荒涼とした冬景色の両方を詠み込んでいることに深みがあるとされている<sup>17)</sup>。また、『御裳濯川歌合』では藤原俊成に「幽玄の躰なり」と評され、『西行法師家集』においては無常と題した中に含まれるものである<sup>18)</sup>。『定家十体』では有心体の和歌として当該歌が挙げられている<sup>19)</sup>。元来、『新古今和歌集』に冬歌として収められ、春を過ぎ去った夢とし、冬の現在を歌うことで無常観や幽玄を表現した歌として評価されていた。

ところが《蘆刈》において当該歌は、冬と春の両方の季節と、なおかつ蘆という語を含むという共通点から用いられたと考えられるものの、その解釈は復縁の喜びに満ちた春の現在がまるで夢のようであると変更されて用いられる。ここでは「蘆の枯葉」が靡く冬を過去に、「難波の春」が現在に、と季節と時間の対応が組み替えられている。また季節と同時に和歌の与える印象が、暗く物寂しいものから明るく喜びに満ちたものへと巧みに転換されているのである。

また《蘆刈》の詞章には、当該歌と共通する「夢なれや」という表現がもう一箇所に見られる。それは男女が和歌を詠み交わし、和歌が夫婦の媒であると述べた後の場面である。

さのみは何をか包み井の。隠れて住める小屋の戸を。押しあけて出でながら。面なのわが姿や。三年の過ぎしは夢なれや。現にあふの松原かや木陰に円居して難波の、昔語らん。

ここには当該歌と同じく「夢なれや」という表現が含まれている。しかし、その「夢」という言葉が指し示す内容が異なっているのである。先に見たように《蘆刈》に引用された当該歌では、「夢」が「難波の春」、つまり夫婦が再会できた現在のことを指しているのに対し、ここでは「三年の過ぎし」、つまり夫婦が離別していた過去のことを指しているのである。すなわち、本来の当該歌と同様に過ぎ去った時を「夢」と表現している。どちらも「夢なれや」という言葉を用いているが、過去を夢と捉えるか、現在を夢と捉えるか、ここでもひとつ転換が起こっている。

《蘆刈》に引用された際の当該歌において「難波の春」とは「難波津」の歌に「今は春べ」とあることから現在を表し、「難波の春は夢なれや」とあるので、「夢」の内容も現在と解釈できる。そして当該歌前後の夫婦再会を喜ぶ詞章から判断すると、明らかに春を表す上句に主眼が置かれていると考えられる。ただし、冬を表す下句を無視することはできない。下句の「蘆の枯葉」に男の苦しんだ時期を含み、それを踏まえて現在の春を扱っていることと、冬の季節感を持つ蘆刈説話を踏まえた上で、謡曲《蘆刈》の季節が春に変更されていることは、重なってくるのである。このような、当該歌と謡曲《蘆刈》の共通性は、禅竹が『歌舞髓脳記』において当該歌を取り上げた理由のひとつであると云えるのではないだろうか。

### おわりに

世阿弥は『三道』において「先、種・作・書、三道より出たり。一に能の種を知る事、二に能を作事、三に能を書事也。本説の種をよくく安得して、序破急の三体を五段に作なして、さて、詞を集め、曲を付て書連なり」と述べている。能作者が本説の種をどう解釈し、変更したかはその詞章によつて表される。本説の種が必要とされる理由は、物語の筋に強固な骨子を与えるということもあるが、本説を知る者には能作者による転換や創作の部分が理解され、その相違する部分を面白味として享受することができるからであろう。謡曲《蘆刈》は、多くの転換が施された曲である。蘆刈説話からの季節感の転換、冬籠りが明けて春になるという曲中での季節の転換、典拠の和歌との比較における夢が表す時間の転換などがあるが、それは結末が幸福な夫婦再縁と変更されていることに大きく起因するものであろう。夫婦が連れ立って都に帰るといふ結末のみを変更するのではなく、それに向かつて季節や趣きを変更していくことが、謡曲《蘆刈》の構成の巧みさであると言えよう。

### 注

① 表章・加藤周一校注『日本思想大系 世阿弥 禅竹』（岩波書店）一

九七四年)による。以下、世阿弥・金春禪竹の伝書本文の引用は本書による。

② 具体的に蘆刈説話と謡曲《蘆刈》との比較を行っているものに、今西実「佐藤ちぢわう・『あしやのさうし』小攷」(『山辺道』第八号 一九六一年十二月)、福田晃「芦刈説話伝承論序説」(『産神問答』「炭焼長者」とのかかわりの中から) (『国学院大学文学第二研究室記念論文編集委員会』「口承文芸の展開 上」桜楓社 一九七四年)などがある。

③ 高橋正治他校注・訳『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館 一九九四年)による。以下、「大和物語」本文の引用は本書による。

④ 佐成謙太郎氏は『謡曲大観 首巻』(明治書院 一九六四年)第五章能楽の価値において「謡曲作者は親子の情愛を讚美する一方、男女の恋愛を極めて排斥してゐるのである」と述べている。

⑤ 佐成謙太郎『謡曲大観 第一巻』(明治書院 一九六三年)による。以下、謡曲《蘆刈》本文の引用は本書による。旧字体は新字体に改めた。また引用中の「」は本書における改行を示す。

⑥ 鳥居明雄「再会と俳優―芦刈」(『鎮魂の中世』ペリかん社 一九八九年)による。初出は原題「芦刈説話論」一・二(『俄草紙』四号 一九七九年九月・五号 一九八一年三月)である。

⑦ 謡曲と季節に関する研究には岡崎正氏「謡曲と季節」(駒澤短大国文)第十五号 一九八五年三月)があり、そこでは「小塩」《嫉捨》《葛城》における季節の「文芸的象徴化」について考察されている。

⑧ 片野達郎・松野陽一校注『新日本古典文学大系 千載和歌集』(岩波書店 一九九三年)による。

⑨ 田中裕・赤瀬信吾校注『新日本古典文学大系 新古今和歌集』(岩波書店 一九九二年)による。以下、『新古今和歌集』本文の引用は本書による。

よる。

⑩ 久保田淳・平田喜信校注『新日本古典文学大系 後拾遺和歌集』(岩波書店 一九九四年)による。

⑪ 佐竹昭広他校注『新日本古典文学大系 万葉集 一』(岩波書店 一九九九年)による。

⑫ 『連珠合璧集』にも「藤とアラハ。(中略)蘆」とある(『統群書類従第十七輯下』統群書類従完成会 一九二四年再版)。

⑬ 近藤喜博編『神道集』(角川書店 一九五九年)による。

⑭ 謡曲《蘆刈》では、蘆刈男の遊狂場面の直後に男女の再会が描かれるのだが、二人はそのまま顔を見合わせ、笠之段以降の詞章にも顔が登場することはない。

⑮ 小島憲之・新井栄蔵校注『新日本古典文学大系 古今和歌集』(岩波書店 一九八九年)による。また引用中の「」は本書における改行を示す。

⑯ 管見の限りでは、頭注などにおいて《蘆刈》における当該歌について考察されたものは、西行法師の和歌を挙げる以外に、「本歌は春の快楽の夢に過ぎたるを感慨せし意なるを。こゝには往時の困難は一睡の夢と去りたる意に取りなして引く」(大和田建樹『謡曲評釈 第七輯』博文館 一九〇九年。引用文中の旧字体は新字体に改めた)、「この歌を夫婦の再会が夢のやうだといふ意にとりなした」(佐成謙太郎『謡曲大観 第一巻』)、「眼前の冬景色を見れば花やかだった春の景色は夢のようであるの意の歌を、上句を夫婦再会が夢のようであるの意に、下の句を「波の立つ」の序に転用した」(横道萬里雄・表章校注『日本古典文学大系 謡曲集 上』岩波書店 一九〇六年)とあるのみである。

⑰ 井上宗雄校注『新編日本古典文学大系 中世和歌集』(小学館 二〇〇〇年)による。

- ⑬ 久保田淳編『西行全集』（日本古典文学会 一九八二年）による。
- ⑭ 佐佐木信綱編『日本歌学大系 第四卷』（風間書房 一九五六年）による。